

Title	日本における京劇
Sub Title	Beijing opera in Japan
Author	山下, 輝彦(Yamashita, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.110 (271)- 117 (264)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2013年度慶應義塾大学藝文学会シンポジウム：京劇と日本：梅蘭芳を中心に 開催日：2013年12月20日(金) 場所：慶應義塾大学三田キャンパス東館6-7階 G-SEC Lab
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0110">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0110</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 日本における京劇

山下 輝彦

私の方のお話は諸先生方と違って、遊びの方のお話しになります。一応タイトルは「日本における京劇」というようにしております。ところで、中国語には「抛砖引玉」(pāo zhuān yǐn yù)ということばがございます。辞書では、「レンガを投げて、玉を引きよせる」という意味ですが、この度、私が定年退職するにあたって、行事の一つとして、シンポジウムをやることになり、本来言語学の方が専門ですけれども、それよりも長い間やってきた京劇についてやったらいいのではないかと思います、これに決めたわけですが、しかし、私の能力では何もできませんので、私という「レンガ」を投げて、本日三つの玉を引き寄せたわけです。私の狙いはとりあえず、果たせたというように思うわけです。悪くいえば、今回は、他人の力を借りる、「狐假虎威」(hú jiǎ hǔ wēi)「虎の威を假る」というようなものです。

まず、中国人にとって、京劇とは何かについて見てみたいと思います。中国のテレビドラマで、「大宅門」(清代末年の話)というのがございます。これは中国の漢方薬の名門「同仁堂」についてのお話ですが、その家では、お婆さんの誕生祝いに京劇の俳優さん呼んで京劇をやるんですね。(京劇のビデオを見る 資料1参照)もっとスケールが大きいでしょうが、恐らく西太后もこんな感じでこういうふう宮中で京劇を楽しんでいたのではないかと思います。本日の私のお話は日本でどのように京劇が楽しまれているかということです。梅蘭芳の来日については、平林先生、袁英明先



資料1

ドラマ《大宅門》に描かれる金持ちの家の誕生祝いにおける京劇

生が話してくださったし、京劇の歴史については、岡先生が解説してくださいました。岡先生は中国の演劇数千年間の歴史を簡潔に纏めてお話くださいました。ありがとうございます。

京劇については、日本ではまず愛好者クラブ「<sup>ピアオフアン</sup>票房」というのがあります。どうも、「愛好者」<sup>シーミー</sup>「<sup>ピアオユウ</sup>戲迷」と「<sup>ピアオユウ</sup>票友」というのは、微妙に違うように思います。私も自分のことを昔、「票友」と言っていましたが、ある人から自分で歌えなければ「票友」とは言えないと言われました。要するに自分で京劇を歌えなければただの「愛好者」だということになります。そこで、「票友」になれるように少しずつ努力しております。日本では日本在住のプロの京劇俳優がおられます。また、プロの京劇団まであります。今日は当事者が多い中で、お話をしますので、話の中で、もし、間違いがあったら、ご指摘、訂正をお願いしたいと思います。

日本人の「票友」つまり自分でも京劇を演じる日本人の方が増えていきます。京劇活動をしている団体については、私が知っている一番古い団体は塩沢伴子さんの「京劇研究会」です。後に張紹生さんの「東京京劇団」、張春祥さんの「新潮劇院」が作られております。その他に魯大明さんの「京劇教室」も作られました。さらに、他に渋谷にある「毎日カルチャーセンター」で袁英明先生が講座を持たれて、その教え子がいまあちこちの京劇活動で活躍されています。もう一つは桜美林大学の「京劇演習」が挙げられます。また、程波さんという方が「太陽芸術団」という団体を経営されて、そこでは民族音楽などの演奏会の他に、京劇の公演を行っておられま

す。特に程波さんなどは小中学校や高校にも行って、色々、京劇を演じて紹介しておられます。最後に挙げられるのは「東京票房」です。

塩沢さんについては、ネットの資料によると、1982年に「秋江」という演目を演じて初めて公演活動を行い、いまでも活動を続けていらっっしゃいます。私が拝見したところ、メンバーのほとんどが俳優志望の方々です。そこは「東京票房」の中国人のメンバーと違うところです。塩沢さんのグループは最初からみなさん演技力が違うんです。「京劇研究会」の特徴は「京劇 + a」というべきで、決して京劇をそのまま演じるということではないです。例えば、日本語で京劇をやったり、あるいは、ギリシア悲劇を京劇の衣装で演じるというような試みもされています。明治大学教授で日本の京劇関係で大きな影響力のある加藤徹先生もこの団体のメンバーで、この方が公演に参加されると、もっと大胆なことを試みるのである。京劇の公演を前衛の舞台のようになってしまうのです。

これは「秋江」です。(画像とちらしをみせる。資料2、3参照)

京劇のセリフは元々同じことばの繰り返しが多いのです。つまり、質問する人のセリフを質問された人がそれをもう一度繰り返して答えたりする。これは俳優さんのいうセリフを楽しむためですが、「京劇研究会」の演目では、二人の登場人物で、一人は中国語、一人は日本語を使って会話します。日本語を使う方は、相手の中国語のセリフの後で、日本語で「いまあなたはこういいましたね」と言って、自分のセリフをいいます。中国語がわからない日本人にもわかるようなやり方です。



資料2  
「東京京劇研究会」公演  
用ちらし



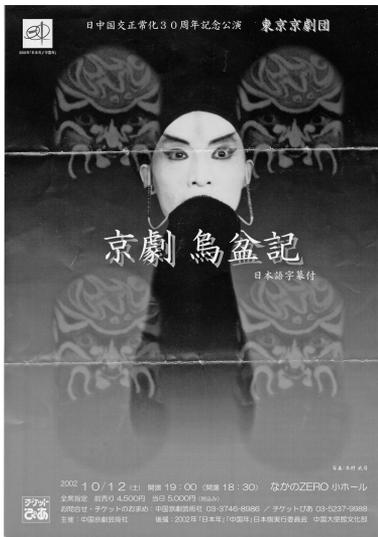
資料3

「京劇研究会」公演《秋江》公演の映像より抽出した写真

一方、張紹生さんの「東京京劇団」の演目を見てみると、張紹生さんは中国京劇院のプロの武生（京劇の立ち回り役）ですが、素晴らしい歌唱力があります。「烏盆記」という演目は非常に歌唱力の必要とする劇ですが、公演された時に私も見に行きましたが、レベルの極めて高い公演でした。（資料4参照）

もう一つの「新潮劇院」については、これから12月23日に公演があります。これは京劇研修生募集のチラシです。面白いですね。「新潮劇院」の研修コースに入れば京劇が習えて、京劇の舞台に立てるといことです。これは練習風景（ビデオをみせる）。加藤徹先生もいらっしゃいますね。ここに映っている方は、金川諒さん、芸名はチャンチンホイ、この方は中国戯曲学院進修課程を修了され、何人かの京劇俳優さんたちに師事している本格派です。「新潮劇院」代表の張春祥さんが自ら指導しておられますね。世界で、外国人に京劇を教えて舞台に立たせるようなところはそう多くないと思います。日本では京劇がわかる層が深いと言わなければならないと思います。（資料5）

次に桜美林大学の京劇活動について見てみたいと思います。袁英明先生と中国戯曲学院出身の花脸（隈取り）殷秋瑞先生のご指導で、一年生から三年生を中心に行っている京劇公演です。この学生達は芸術文化学群というところで、演劇やダンスを専攻している学生達ですので、非常に上手ですね。先ほど平林先生から私がこの公演に参加したと話されました。ご承知のように公演の際、伴奏者の京胡（京劇伴奏の胡弓）と京二胡（低音の胡



資料4

張紹成主演による歌中心の京劇《烏盆記》公演用のちらし



資料5

張春祥「新潮劇院」の研修生募集用ちらし

弓) 奏者は舞台上に少しはみ出しているのですが、観客席から見えますが、指揮者(京劇用鼓奏者)は見えません。私はどうしても指揮者の手元を見たくて、バンドに加わって間近で見てみたいと思い袁英明先生にお願いして、伴奏楽器の月琴を担当するという形で桜美林大学の公演に加わらせて頂きました。これで、打楽器全体の演奏をじっくり見せて頂きました。今後打楽器の演奏について、京劇の演出の中における役割などについて、もう少し詳しく調べ、何かに纏めて発表したいと思っています。今回は間に合いませんので、日本における京劇という一般的なテーマのお話でお茶を濁させていただきたいと思います。

次に「東京票房(京劇愛好者クラブ)」についてもう少し詳しく見てみることにいたします。その創立は非常に古く、1949年創立となっております。世界で一番古い歴史を持つと言われております。実はこれは東京票房をテーマに論文を書かれている、慶應大学非常勤講師で、票房の責任者でもある呉敏先生の資料によるものです。終戦後、連合国軍が戦後処理のた

めに日本に駐留するわけですが、その中に、当時の中華民国の将校たちも東京に来たわけです。その中で、京劇の好きな人が多く、「中国駐日代表団同仁平劇組」というものを作りました。国民政府は中国の地名「北京」を認めていませんので、当時は「北平」と呼んでいました。「同仁」は同僚または同じ趣味を持つという意味ですので、これは京劇クラブという意味になります。それが1953年に実業家でプロ級の胡弓の腕前を持つ票友であった章英明氏という人が香港から日本に移住されクラブに参加された際に「中国京劇業餘研究社」という名前に変わりました。もちろん、この「業餘」とは仕事の合間、仕事のない時間に行くという意味ですので、アマチュアという意味になります。中国でもアマチュアの京劇クラブは「何とか社」という名前が多いので、このような名前が付けられたと思います。実はここでは多くの日本人が「票友」として育っています。中には東京で京劇の活動を行う場合、絶対に欠くことのできない人、明治大学教授の加藤徹先生がおられます。加藤先生の「京劇城」は日本の京劇についてネットで調べる際に、必ず見るべきと言えるサイトです。加藤先生は東京票房出身の最も古い日本人「票友」のお一人ですが、その後、現在多数の大学で教鞭をとっていらっしゃる波多野真矢女史、国際交流関係のお仕事をされている野口裕子女史を始め何人かの日本人が同票房を経て「票友」になっています。中でもお二人は、日本で京劇に興味を持ち、それが高じて中国へ滞在する機会を得た時に現地で本格的に「青衣」（女性役）を学び、現在では公演を行うほどのレベルを有しています。ところで、加藤先生が東京京劇票房60周年公演会のプログラムに次のような文章を書いています。

「私が最初に東京票房に足を踏み入れたのは1984年の春で、当時、私は東大の二年生だった。今と違って当時、日本語で読める京劇の本は少なく、大学でも京劇の講座はなかった。京劇の知識や情報に飢えていた私にとって、票房は、週一回、生の京劇に触れることができるオアシスだった。票房では、何十年と京劇を愛好してきた中国人たちから、読書では得られない、京劇についての空気や呼吸のようなものを学ぶことができた。あれから25年。過去4半世紀のあいだ、日本も中国も変わった。私が東京票房に

資料6  
東京票房公演《大登殿》  
舞台写真



資料7  
桜美林大学演劇学科京  
劇セミナー  
「楊門女将」の舞台写真



通いはじめた1984年当時、日本に定住する中国人は7万人に満たなかった。2009年現在では70万人である。東京都に住む在日中国人だけでも15万人に達し、現在、都民の1.2%は在日中国人だ。中国人は10倍に増えたが、票房の数は増えていない。今も昔も、票房は日本ではただ一つ、ここだけである。票房の共通語は「京劇」だ。東京票房に一步足を踏み入れれば、もはや中国人も日本人も、老人も若者も、区別はない。自由と言おうか、開放感と言おうか、この空気を一度吸うと、その味にやみつきになる。昔とくらべると、京劇の愛好者はずっと増えた。インターネットなど、京劇の知識や情報を得る手段も増えた。大学の授業やカルチャーセンターの講座などで、京劇の実技を教えるところは、いくつかある。しかし、票房のような場所は、他にはない。」

また、東京票房の会長呉敏先生は日本で発行されている中国語の新聞に「東京砂漠の中のオアシス」という文章を書いて紹介しています。(京劇活動の様子をビデオで見せる。資料6参照)

最後になりましたが、桜美林大学の演劇演習の京劇公演をご紹介します。これは本来袁英明先生が紹介してくださるべきものですが、僭越ながら私がこの数年間公演を見に行ったり、参加したりした経験に基づいて紹介させていただきます。数十人の学生が参加されていくつもの演目を学生に習得させて演じさせる。これは指導する方も大変だろうと思います。同じ演目で人によって日本語でセリフをいうバージョンと中国語でいうバージョンがあります。中国以外の大学で京劇を教えているというのは非常に珍しいと思います。(資料7)

要するに日本における中国の京劇の活動は非常に活発で、外国人が自発的に京劇を学んだり、公演を見て楽しんだりするのは、世界では日本が一番層が厚いのではないかと思います。